■ 田口（たぐち） 光久（みつひさ） さん

元サッカー日本代表ゴールキーパー

2019年11月12日死去、64歳

有言実行 強気な守護神

3/15 読売

丸っこい体形から、ついた愛称は「ダンゴ」。だが、ピッチ上ではその名に似合わない俊敏な動きと強気なセービングで、三菱重工（現・J1浦和レッズ）の黄金期を築き、低迷していた当時の日本代表も主将として支えた。

秋田商高から1973年に入団した三菱重工では、大きな壁が立ちはだかった。当時のゴールマウスにはメキシコ五輪で銅メダルを獲得した日本代表の守護神・横山謙三さん(77)が君臨していた。

「どうすれば横山さんに勝てるのか」。常にこう考え、ゴール前で待ち構えることが主流だった当時としては珍しく、ペナルティーエリアから迷いなく飛び出す大胆なセービングを武器にした。先輩後輩関係なく、最後方から大声で指示を出した。

果敢なセービングで存在感を見せた田口さん（今井恭司さん提供）

したたかさも併せ持っていた。身長は1メートル75だが、大きく見せて相手チームに重圧を与えようと、プロフィルには「1メートル78」と記載させた。他チームの試合にも顔を出し、選手の癖をノートに記した。

74年元日の天皇杯決勝。ケガの横山さんに代わり先発に抜てきされると、物おじしない堂々としたセーブを見せ、優勝に貢献した。その後、監督となった横山さんが作った守備重視のチームで主力となり、日本リーグ、JSLカップ、天皇杯の三冠を獲得した。「良い感性を持った選手だった。時代が違えば、もっと活躍できる選手になっていたかもしれない」と横山さん。草サッカーではFWとして点を取るほど足元の技術にも優れていた。

75年には日本代表として国際大会に初出場。その後、主将を任され、アジアでも苦戦していた当時の代表を引っ張った。同じ秋田県出身で、日本代表で共にプレーしたJ1横浜FC会長の奥寺康彦さん(68)は「秋田人には珍しく口数が多いが、有言実行する男。試合でも『もっといくぞ』と鼓舞していた」と懐かしむ。

29歳の若さで現役を引退後、高校の指導者となり、当時無名だった青森山田高などを全国大会に導いた。一方で、テレビのバラエティー番組にも出演し、番組内のPK対決ではとんねるずの木梨憲武さんらと共演。現役時代よりふっくらした姿ながら俊敏な動きは健在であることを示し、お茶の間を盛り上げた。

三菱重工の同期入団で引退後も親交があった関口久雄さん(65)は「陽気で初対面の人にも好かれ、周りにいつも人の輪ができていた。バイタリティーにあふれ、人の倍の熱量で生きていた」と振り返る。葬儀には、共にプレーした選手や高校時代の教え子も多く駆けつけた。

（東京社会部　蛭川裕太）